



収束するやに思えた新型コロナウイルス、今度はこれまでよりも感染力が強く、ワクチンが効きにくいであろうと考えられるオミクロン株なる変異を新しく作り出し、すでに世界各国での感染が確認されています。東北ではまだ感染の確認はありませんが、第6次の蔓延が大変心配な状況になっています。なんとか、基本的な感染対策を徹底して、回避できることを願う日々です。おこならいことをねがいつつを心配しながらもつかの間の解放感に浸っているのではないのでしょうか。

さて、2021年度の第4回の東北ハイテク研究会セミナー「サツマイモ 北への展開 ーどう作り、売るかー」を11月30日（火）に全国各地から57名の参加者を得て開催することができました。ニュースレター第57号では、このセミナーの概要についてお知らせします。

セミナーの目的

サツマイモの経済栽培には平均気温が18℃以上の日が4か月必要といわれ、これまでその北限は福島県とされてきました。しかし、最近では気候温暖化もあり、宮城県で経営品目の一つとしてサツマイモが取り入れられ、さらに北海道でも大規模な栽培が行われるようになってきました。一方で、これまでサツマイモの主産地であった西南日本では新しい病害の発生などにより減収が目立ち、関東以北での生産に熱い目が注がれています。

このように、サツマイモの栽培は北へと広がりを見せていますが、そもそも中南米の熱帯地域を起源とするサツマイモの安定的な生産のためには、様々な取り組みが必要と考えられます。

そこで、宮城県と北海道でサツマイモ生産を始めたお二人の経営者から寒地や寒冷地でサツマイモを栽培する場合の工夫や販売展開についてご紹介いただき、これからの東北地域でのサツマイモの生産拡大に向けた見交換を行うために、このセミナーを開催しました。

開催の日時と場所

日 時：令和3年11月30日（火） 13:30~15:15

開催形態：Zoom ウェビナーによるオンライン開催

主 催：農林水産省 農林水産技術会議事務局 研究推進課産学連携室
東北地域農林水産・食品ハイテク研究会

参加者数：57名

プログラム

挨拶 東北地域農林水産・食品ハイテク研究会 門間 敏幸

第1 報告 「住民参加型による持続可能な新しい農業経営」をコンセプトとした経営におけるサツマイモの位置づけ

株式会社やまもとファームみらい野 常務取締役 馬場 仁 氏

第2 報告 ここえるさつまいもを守りたい

香西農園 小西 静江 氏

質疑討論

司会：東北地域農林水産・食品ハイテク研究会 小巻 克巳

講演内容

第1 報告では、東日本大震災により甚大な津波被害を受けた宮城県亘理郡山元町で、震災後新しく整備された360haのうち、120haを畑作エリアとして栽培を任された株式会社やまもとファームみらい野の常務取締役の馬場仁さんから、作付け品目の選定から栽培、経営の安定化に向けた取り組みが紹介されました。

まず、作付け品目の選定に当たっては、①機械化一貫体系が出来る、②過去に栽培されていた作物、③砂地で地下水位が高くても栽培が可能なことを条件とし、サツマイモ(15ha)、タマネギ(19ha)、大豆(輪作作物)(18ha)などが選ばれたことが紹介されました。

課題との闘い（歴史への挑戦）

「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」この地域でイチゴ栽培が定着した歴史を知らず露地栽培へチャレンジ 品種改良や栽培技術の高度化と普及が、これまでの歴史に勝った？

【タマネギ】秋の季節風で表層の砂が舞い上がり定植した苗が吹き飛ばされ壊滅状態

粘質の土を入れた客土や防風帯の設置で再整備

【夏ネギ】春の長雨で圃場から水が引かず減収

額縁明渠による再整備

【サツマイモ・秋ネギ】梅雨長雨により同一圃場内でまだらに水が引かず大幅減収

再整備

発生都度、圃場再整備の要請 ⇒ 再整備 ⇒ 作付 ⇒ 再整備 ⇒ 作付

その間、雑草対策とネズミの駆除、作型に合わせた品種試験等を繰り返し

▶ 令和2年、設立から5年が過ぎたても、品質・収量とも安定化しないことから、販路も市場に頼るしかなく販売面でも苦戦。いまだ当初の計画で見込んだ、5年目に経営黒字化が見通せない状況に陥る。

▶ 令和2年度、一旦全ての品目、作型、作付面積をリセットする経営再建築でリスタートを決定。

※特に、さつまいもは産地としての知名度もなく、生、干し芋とも在庫を抱えての年度越えとなり、1/3に面積を削減。

◆ 光明は、タマネギの作型(播種を早めて苗を大きくし定植(風対策))と品種が確立し始め、一定の収量品質が見込めてきたこと。

しかし、設立から5年が過ぎても、いずれの品目も品質・収量とも安定化しなかったため、令和2年度からすべての品目を再度一から見直し、その結果、未だ除草対策など栽培上の課題はいろいろあるものの、タマネギでは期待に近い収量が得られ、サツマイモも品質が向上や九州経済連合会の協力で始めた海外輸出により、青果用や干し芋の販売が好調になったことが紹介されました。



第2報告では、北海道滝川市でお菓子屋さんと連携してサツマイモを栽培している香西農園の小西静江さんから、冬の北海道の寒さにもかかわらず加温された貯蔵庫のなかで春を待つサツマイモについて愛情たっぷりの話題提供がなされました。植付けは5月下旬、収穫は10月上旬という条件でも2t/10aの収量が得られること、「鳴門金時（高系14号）」を「紅寒雪」と名付けてブランド化していること、その際キュアリングを二度行っていること、生クリーム大福や干し芋を加工し高価格での販売を目指していること、など生産や貯蔵にかかる経費を上回る販売益が出るような取り組みが紹介されました。また、クラウドファンディングによりサツマイモ収穫機や洗浄機を購入するなど、これまでにない取り組みも紹介されました。



サツマイモ作付の推移と主な出来事

年	作付	出来事
H24	500株	滝川市内の製菓店
H26	1,200株	ほんだ菓子司と取引開始
H27	1,700株(4a)	農商工連携認定 出張焼きいも
H28	7,100株(20a)	クラウドファンディング
H29	16,000株(60a)	貯蔵庫建設 ブランド化 紅甘雪
H30	16,000株(50a)	加工品 紅甘雪のやきいも
R01	18,000株(60a)	おいもの株主制度
R02	18,000株(60a)	加工品 生クリーム大福 紅甘福
R03	15,000株(50a)	加工品 干しいも

以上の報告に基づいて、東北ハイテク研究会の小巻克巳中核コーディネータの司会で、Zoomの質問・チャット機能を活用して参加者との質疑討論を行いました。質問・チャットのいずれについても多くの質問が寄せられ、講演者はその一つ一つの質問に丁寧に回答されました。

本セミナーを通して、東北以北でのサツマイモ栽培は生育期間の短さ、苗の確保、雑草管理、マルチ除去とその後の収穫、貯蔵など克服しなければならないことは多くありますが、思いのほか収量は確保されることが明らかになりました。こうしたことから、サツマイモの栽培は寒地や寒冷地でも可能で、収益性も期待できるということが確信でき、非常に有意義であったと感じました。

なお、本セミナーに関する資料を当研究会のHP（下記URL）に掲載していますので、ご参考にしてください。

<http://tohoku-hightech.jp/seminar.html>